

雷の日常は

ねこたつ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とあるシリーズのオリジナル日常集

※この作品は世界観とキャラを使つた、自己解釈に満ちた設定です。

細かい違いは広い心でスルーしてください。

目

次

ありふれた日常

デー  
ト

出会  
い

初  
戦

華  
鈴

24 19 13 8 1



# ありふれた日常

「…………朝か」

早朝の静かなワンルームに呟きが溶ける。

ベッドから体を起こし、やや狭い部屋を見渡す。

収入でいえばツーランク程上がるのだが、質素な暮らしを好む彼は数年間この部屋で暮らしている。

「りーんちゃん！」

「おはよう千聴、また抜け出したのか」

突然現れた少女をさも当然のように扱う。

そして自然な流れで着替えを手伝い始めるのも、彼にとつては当然の事である。

「いつ見てもかつこよくて綺麗な体だよねえ、おつきな背中もすべす……」

「…千聴？」

「ねえりんちゃん…この切り傷何？」

唐突に低いトーンで尋ねる少女。

目のハイライトが消えて異様な迫力を出しているのだが、背中を見せている彼は気付

かない。

「切り傷…仕事のやつだな、木製のクロスボウだったから反応が遅れた」  
「切り傷…私のリンちゃんに傷…今すぐそいつ消さなきや…」

「…」

「必ず見つけ出してリンちゃんむつ!?」

見慣れた光景なのか、自然な口付けで黙らせる。

見開かれた瞳に光が点り、蕩けて細められるまでさほど時間は掛からなかつた。

「全員拘束してぶちこんださ。千聰は笑つてた方が俺も元気になる、知つてるだろ?」  
「…リンちゃんはいつつもずるいんだよお〜」

第三者が見たら砂糖を吐きそうな甘い空氣だが、これが二人の日常である。

「これは学園都市最強の電撃使い『御坂華鈴』と、その恋人『琴葉千聰』の日常記である。

「おはようございます、お兄様」

「黒子か、おはよう」

「黒ちゃんおはよー」

「琴葉お姉様もやつぱりここでしたのね…」

「？当たり前だよ？」

「はあ…」

少しげんなりとしたツインテールの少女と、朝の町で合流する。

『白井黒子』学園都市屈指の名門『常盤台中学』に通う一年生であり、千聰と同じ空間移動能力者である。

「朝の見回り中？」

「近頃早朝の騒ぎが増えておりますので」

「相変わらずゴミはどこにでも涌き出すな」

「辛辣なリンちゃんも素敵…」

「お姉様…」

能力の指導をしてくれた自分の師匠を、冷めた目で眺める黒子。

同じ能力で『自分より格上』の尊敬する先輩なのだが、こればかりはいつまで経っても慣れそうになかった。

「本日はどうなさいますの？」

「そろそろ美琴が欲求不安になつてゐる頃だから、ガス抜きに少し遊んでやろうかと」

「みこちやんは戦闘狂だからねー」

「一応うちの最強戦力なんんですけど、お兄様には敵いませんわね…」

「まだまだ子供だからな」

常盤台中学が誇る最強の電撃姫だが、実際兄には一勝も出来ていない。

そのせいで何度も挑むようなバトルジヤンキーになつたのだが、兄妹故か手を抜いても即座に看破するので勝ち星はやらない。

そんなゆつたりとした時間を、背後から飛んできた電撃がぶち壊す。手をかざして吸収する華鈴と、突然の閃光に驚く少女たち。

「勝負よ華鈴！ 今日こそ勝つてやるんだから！」

「朝から元気だな美琴」

「おはようございます、お姉様」

「みこちやんおはよー」

「おはよう黒子、琴葉先輩。じやなくて！ 今日こそ私が勝 「ところで美琴」 つ？」

「勝負は良いが、二人を巻き込むような不意打ちは感心しないな」

「どうせ効かないんだから問題な 「美琴？」 …めんなさい」

跳ねつ返りの強い性格だが、悪いところはしつかりと反省できる。

その人柄の良さが常盤台中学二年のレベル5『御坂美琴』の魅力でもある。

「今日も吸収はしない方がいいのか?」

「私に出来ないことをするのは反則でしょ!」

「お姉様、それはハンデ戦になるのでは?」

「黒子は黙つとく!」

二人のテレビーターによつて場所は変わる。

野球場ほどの広さの運動場を、大型の蓄電設備が周囲を取り囲む。華鈴が用意した“美琴の発散場”である。

地面は大量の砂鉄が混ぜられており、いくらでも使えるように。

戦闘の余波で流れた電気は全て吸収され、学園都市中に流される作りになつていて。余談だが手を繋いで移動する黒子たちと違い、千聰は正面から抱き付いて移動する。この方が安定するそうだが、完全な言い訳であることはこの場の全員が理解している。

「行くわよ華鈴!」

「いつでもいいぞ」

挨拶代わりに先程の倍近い電撃を飛ばすが、涼しい顔で背後の蓄電器に誘導する。

わかりきつた結果に舌打ちしながら、地面の砂鉄を槍状に集めて撃ち出す。しかし華鈴も同様に砂鉄を集め、鋭い鞭で両断する。

「あーもう！」

「次はこっちの番だな」

砂鉄を無数の細い針状に集めて、美琴を取り囲むように一斉に発射する。

咄嗟に周囲の砂鉄をドーム状に固めて、必死に防御する。

「行くぞ美琴、気を付ける」

針を撃ち終わった瞬間、華鈴は砂鉄を槍状に固め大量の電流で高速射出する。

「やば！」

それを感知した美琴もドームを崩しながら、ポケットのコインを撃ち出す。

二つのレールガンが拮抗したのち、華鈴の槍が貫いて美琴に迫る。

いくらか減退した槍をなんとか電撃で相殺するが、背後から首の動脈に寸止めされた刃に気付けなかつた。

「…私の敗けだわ」

「俺の勝ちだな」

刃が離れたことでゆっくり振り向くと、手刀に纏わせた砂鉄を振り落とす華鈴を眺め

る。

「なんで勝てないのよ…」

「大技を狙いすぎなんだ。状況に合わせて細かくすれば、隙も減る」

アドバイスをしながら頭を撫でる兄と、不貞腐れながらも受け入れる妹。  
微笑ましい雰囲気だが、穏やかでないものが一人。

「みこちやーん？」

「ひや！ 琴葉先輩！？」

「リンちゃんの呼び捨てはダメだつて、いつも言つてるよねー？」

「いやそれは「みこちやーん？」…ごめんなさい」

黒いオーラを出しながら叱る千聰に、ビクビクしながら美琴は謝る。  
そのまま華鈴に向き直り、顔を赤らめながら一言。

「ありがとう…お兄ちゃん」

「どういたしまして」

可愛らしいですわお姉様ーー！だの、うつさい離れる！だの声が響く中、腕を絡めながら眺める二人。

学園都市は今日も平和である。

# デート

とある暑い夏の日

滴る汗を拭きながら歩き回る人々を眺めつつ、男女はソファで寛いでいた。

男『華鈴』はパソコンで文章を書き込み、女『千聰』はその様子をニコニコしながらノートに描いてゆく。

そんなまつたりとした時間の中で、ふと華鈴はキーボードをたたく手を止めた。

「ちよつと出掛けるか」

「今日暑いよ？ 来週曇りみたいだし、それからでもいいと思うけど」「デートしようかと思 「行く！」 良い反応だな」

「そうならそうと早く言つてよね！ 私楽しみにしてたんだから！」

「じゃ来てくれるか？」

「もちろん！」

「デート、デート、リーンちゃんとデート♪」

「(ご)機嫌だな」

「だつて特別な日だもん、当たり前だよお♪」

千聰が一度自室に戻り、30分後に集合した。

華鈴は水色のシャツをまくり黒のスラックスといったラフな恰好。

千聰は同じく水色の膝丈ワンピースにニーハイソックスと薄いカーディガンを合わせた、シンプルだが夏らしい格好となっていた。

「にしても二人とも同色の服とはな」

「愛の力だね♪」

互いに腕を絡めながらゆっくり歩く二人、気温とは別の熱い空間となっていた。

「暑くないのか？」

「少し暑いけど肌を出すのは嫌なのー」

「そんなものか」

「私の素肌はリンだけの特別なんだよ？」

「それは光榮だな」

さらに甘さを含んだ空気に周囲の人は距離を取り、徐々に視線を逸らしてゆく。

しかしそんなことに全く気付かない二人は、ゆっくりを街を歩いて行つた。

「あれは…黒子か？」

「みこちゃんもいるね」  
目的地である映画館に入ろうとした時、向かいの建物から丁度黒子と美琴が出てきた。

なにやら探しているかのように辺りを見回している様子に、二人は首をかしげる。  
「話しかけるか？」

「ん~嫌、今デート中なの」

「…まあ用があつたら連絡してくるだろ」

「今は私だけ見てて？」

「了解だ」

「…琴葉先輩？」

「ほんとですわ、お兄様にお姉さま」

風紀委員の仕事で街を回っていた黒子と美琴は、熱い視線を交わしながら映画館に入つてゆく華鈴たちを目撃していた。

「どいうか外でもあの調子なのね」

「ほんと熱々ですわよね」

「見てるこっちが熱くなるんだけど」

「なら次はあちらの区画を調べてみましよう、まだ遠くには行つてない筈ですの  
なんとなく逃げるよう、二人はその場を後にした。

「面白かったね」

「そうだな」

映画を見終わつてしばし余韻に浸る二人、考へてることは全く別なのだが。

(途中でうとうとしたのはバレてないはずだ)

(途中でキスしちやつたけどバレてないよね)

案外同じかもしない。

「…中が騒がしいな」

「…そうだね」

((ゴミが湧いてきた…))

同じだつた。

それは一つのスクリーンで起つていた。

婦女暴行で追われていた男は、ラブロマンスの真つ最中に怒りを爆発させた。  
レベル3の発火能力を存分に使い、カツプルたちに火傷を負わせてゆく。

気に入らない、何もかもが気に入らない。

自身の境遇も周囲の幸せも、何もかもが男の神経を逆なでする。

目の前で泣き叫ぶ少女に、怒りを込めた全力の火球を投げつける。

飛んで行つた火球は突如、黒い何かに飲み込まれて消えた。

その直後耳元で聞こえた「眠れ」の声と、雷に打たれたかの衝撃で意識は途切れた。

「道の真ん中に飛ばしたから、すぐに黒ちゃん達も気づくはずだよ」「相変わらず恐ろしい速度のテレビポートだな」

「リンちゃんほどじゃないよ！」

「帰りにクレープでも食べるか？」

「半分こしよ！リンちゃんも食べたい！」

「俺は帰つてからな」

のんびりと言葉を交わしながら映画館から出てくる二人。

突然の爆発と通報を受けた風紀委員で、周囲は騒然としていた。

それでも二人は変わらない。

今の二人の世界にはお互いかいないから。

やがて喧騒に飲まれるように、抱き合つた二人は姿を消した。

# 出会い

「…一人か？」

「…貴方は、誰？」

「リンちゃんとの出会い？」

とある喫茶店で三人の少女たちが、昼食を共にしていた。

常盤台中学一年『白井黒子』二年『御坂美琴』三年『琴葉千聰』の三名である。

学年は違えどとても仲の良いこの三人は、学校内の時間をほとんど共有していた。

「お姉様とお兄様の仲睦まじい様子は、とても憧れていますの」

「私は別に興味ないけど、華鈴の「みこちゃん？」…お兄ちゃんの事は知つておきたいし」

「一緒に住んでたわけじゃないんだ」

「離れてる時間の方が長かつたから、…お兄ちゃんの事知らないことも多いし」

「ふふふ、そつかそつか」

「学校内ではほとんど表情が変わらず、成績優秀な淑女なのだが彼が関わると豹変する。」

あまり知られていない事なのだが、二人をよく知る者にとつてはもはや常識である。

「じゃあ少し恥ずかしいけど、話してあげようか。あれは4年位前の事だつたなー」

あれは私が自殺も考えて路地裏を彷徨つてた頃。

自分と周囲に絶望しちやつて、何もかもどうでもよくなつてた頃の話ね。

「先輩にそんな時期が：!？」

「私だつて人間だからね、自己嫌悪してたよ」

「今はされてないんですの？」

「リンちゃんがダメだつて言つてくれたからねえ♪あの時のリンちゃんは本当にかつこ  
よくて：」

「お姉様、話が脱線しますの」

多分そのままいたら誰かに犯されてたかも知れない、それでも構わなかつたの。  
それくらい全てがどうでもよかつた。

次の角を曲がつて最初にあつた人にめちゃくちやにしてもらおう、そう考えて歩いて  
行つたの。

そこで出会つたの。

何者も寄せ付けないような、寂しい目をしたリンちゃんと。

「お兄様が？」

「全然想像つかないわ」

「今じやすつかり丸く収まつたからねえ」

その時は私自身ちゃんと見れてなかつたし、私を壊してつて言つたの。

そしたら「わかつた」つて言つて、家まで連れてつたの。

「誘拐ですの」

「誘拐ね」

「とりあえず最後まで聞いてねー」

ワンルームに上げられて（ようやく終わるんだ）つて思つた私は、まずお風呂に入れられた。

すぐ優しく体を洗われて、髪を拭いてもらつたら暖かいご飯が出てきて。

そこで何かおかしいつて思つて聞いたの、そしたらね。

「今のお前を壊せばいいんだろう？」

そう言いながら頭を優しく撫でてくれたの。

よく頑張つたつて、もう泣いていいんだつて、立ち直れるまで隣にいてやるつて。

「あの時はホントにたくさん泣いたなー」

「さすがお兄様ですの」

「まあ…良いとこあるじゃない」

「その時からどんどんリンちゃんにのめりこんでつちやつたのよねえ。私結構ネガティブなどころ多かつたから、優しく怒つてくれて寂しいとか悲しいとか全部言つていいって言つてくれて。へこんだ時も優しく話を聞いてくれて、お願ひしたら抱きしめたりもしてくれて。その時の優しい目とか暖かい腕とか安心する匂いとかもう全部最高で、それから」

（ちよつと黒子、すつごく長くなりそうなんだけど！何とかしなさいよ！）

（そんなこと急に言われても困るんですの！）

「えっと、お姉様はどうして常盤台を選ばれたんですの？」

「その時の顔もホントかっこよくて…？ここに来た理由？もちろん覚えてるわ」

（助かつた…）

それから半年くらいかけて少しづつ笑えるようになつて、何か恩返しがしたくなつたのね

でも私はホントに世間知らずで、周りの事も何も知らなくて。

それで聞いてみたの、色んなことが知りたいって。

そしたら常盤台を進められて、教わりながら頑張つて勉強したの。

「お兄様つて学力高いんですねの？」

「常盤台の過去問は毎回暇つぶしに解くって言つてたよ?」

「あれを暇つぶし…?」

色々なことを知つて、たくさん助けられてたつて知つて。

そつけなかつたけど大切にされてたんだつて、優しくされてたつてことに気づけた  
の。

だから私の全部で恩返ししていくつて決めたの。

リンちゃんからたくさん笑顔と幸せをもらつたから、今度は私がたくさん笑顔にして  
あげるの。

「それが今の私の夢かな」

「とても素敵なお話ですわ」

「悪くはなかつたわね」

「…あ!リンちゃんが暇してゐる気配、私行くね!」

「ちよつ…もういないし」

「流石お姉様ですの」

(結構良いとこあるじやん…見直したかも)

「リーンちゃーん!」

「千恵か、丁度良かつた。夕飯を迷つていてな、決めてくれるか？」  
「じゃあ一緒に作ろう！とびきり美味しいの食べさせてあげる！」

# 華鈴

「昔の俺の話？」

「彼が自室でくつろいでいた時に、何か思い付いたように千聰が訪ねてきた。  
「私と会う前のリンちゃんはどんなだつたのか、知りたいなーって」

「⋮あまり面白くないぞ?」

「それでもいいーの！」

「まあ構わんが、何か飲むか?」

「紅茶が良いなー」

昔の俺を一言で表すなら、暗い奴だつた。

今もそうかもしだんが。

母と妹が元気潑刺だつたから、余計そう感じたのかもしだれない。

「そんなに違つたの?」

「口数は今と変わらんと思うがな」

それからは何かが吹つ切れてな、壊れたと言うべきか。

「…リンちゃん  
「…なんだ？」  
「…すまない」

「ちょっとこっち向いて、私の胸で泣いて」

ある実験の最中で、出力を謝つて相手を炭化させてしまつた。  
絶望した、これだけ頑張つても何一つ成長していない。  
これでは何も守れない。

完璧に制御しきるまで俺は危険だ、そう判断して家族の元を去つた。  
妹は大泣きしたらしいが、当時の俺はそれどころじやなかつた。  
一秒でも早くモノにしなければ、必ず誰かを殺すことになる。  
そしてその直感は正しかつた。

能力開発を受けて、突然こんな力を手にして。  
最初に感じたのは恐怖だな。

人を傷つけることに躊躇いがなくなり、戦闘技術をひたすら磨く日々が続いた。裏の仕事もやるようになつて、積極的に人を殺したようなものだ。

人間は慣れる、それが殺人であつても。  
すつかり俺の日常になつていたんだ。

「…どうした？」

「悲しくて泣いてるの」

「なぜ千聰が泣くんだ？」

「いつものリンならわかるよ？」

「…少し話しが過ぎたようだな、自分しか見えていない感覺だ」

「最後まで聞かせて」

「話はほとんど終わりなんだが：違うな、続きがあつた」

「聞く」

ある日の夜、仕事を終えて何となく路地裏を歩いた。

理由はない、ただ何となくだ。

下を向いた人間を眺めながら、俺もいつかこうなるのだろうと思つていた。

そこに出でたのが、千聰だ。

「私？」

「初めて会った日のことだ」

その濁つた目を一目見てわかつた、俺と同じだと。

ならばこいつを救うことで、自分も何か手に入れることが出来るかもしれない。

最初はそんな打算的な思考だった。

励まし支え、抱いての毎日だつたな。

だんだんと人間らしさを理解できるようになってきた頃に、お前も少しずつ笑うようになってきた。

気付いてなかつたかもしけんが、その笑顔に随分救われた。

「また泣いてるのか？」

「これは嬉し泣きなの！」

「違う涙なのか、不思議だな」

「ねえリンちゃん」

「ダメだぞ」

「まだ言ってないよ!?」

「危険なことはさせたくない」

「私だつてして欲しくない！」

「…」

「…」

「…臨時メンバーだ、協力者以上にはさせんぞ」

「…まあ、よし」

# 初戦

「なんでこんな時に、タイミングよく来るんだろうな」とある廃工場を一組の男女が歩き回る。

男『華鈴』は電磁波をばら蒔いて辺りを素敵し、女『千聰』は不安そうに見回しながら腕にすがり付く。

手伝うと言った矢先に入ってきた仕事、工場内の不審人物排除。最初は威勢がよかつたのだが、千聰は大のホラー嫌い。

戦力として期待は出来そうにはないと、華鈴は早々に意識を切り替える。

「今のところ反応は無いな」

「何もいない何もいない何もいない…」

「…置いてきた方が良かつたか」

「…ん？」

しばし探索した頃、広範囲に蒔いた電磁波が何かに反応した。成人8人程を感じした華鈴は、千聰に合図し移動する。

保護対象と化した千聰の手を引き、集団との距離を積める。

「今だ！」

突如響いた叫び声と共に、足元が揺らぐ感覚が襲いかかる。

反射的に電磁波で周囲を確認すると、千聰と入れ替りで男が一人。にやけ面で首に機械を押し付けている。

「動くんじやねえぞ、向こうに送った女がどうなつても知らねえからな？」

「指定座標の入れ換えか、探知系もいるようだな」

「うちのボスの透視能力で確認したが、中々いい体の女らしいじやねえか。大人しくしてりや俺らで回した後返してやるからよ、抵抗すんなよ？」

「…お気の毒だな」

「あん？」

一方千聰は自分とは違う転移感覚に、少し冷静さを取り戻していた。

「うひょー、さすがボスっすね！」

「結構いい女じやん？」

「ボス、体はどんな感じですか!?」

華鈴とは違う男の声に、警戒を強める。

周囲を囲まれており、正面に陣取る男がリーダー格のようだ。

舐め回すような強い視線を感じ、千聴のなかで不快感が膨れ上がる。

「いい体だぜ、柔らかそうな胸と尻だ」

「…何言ってんの？」

「俺の能力は透視、服のような単純な構造なら無いも同然。今もバツチリ見えてるぜえ、そのつるつるまんこもな！」

「つ?!」

咄嗟に体を隠してしゃがみこむが、その様子に男達のにやけ面が増してゆく。  
顔を俯かせる千聴を羞恥と感じたのか、リーダーの男がゆっくり近づきながら話しかける。

「男の方は拘束してあるからな、五体満足で帰りたけりや大人しくしろ。朝までには終らせてやるからよ、最高に気持ちよくして「…んじやえ」」

瞬きの内にリーダーの肉体が消える。

残った服が落ちる音に、周囲の男達が動搖し始める。

「絶対許さない」

集団の反応が一人を除いて消失した、透視したこと得意気にばらしたのかもしれな

い。

「わざわざ虎の尾を踏み抜くとはな」

「さつきから何言つてやが「リンに何してゐの?」る?...ヒイ!?

男の背後に無表情の千聴が音もなく現れ、怒り狂つたような視線を突き刺していた。

「全員殺さずは守つたのか?」

「警備員の本部に飛ばした、残りはそいつだけ」

「ちつ近づくんじやねえ!こいつがどうなつてもいいのか!?」

必死に脅そうとしているが、押し付けられてるスタンガンは既に電池切れである。

黒いオーラを纏つた千聴を眺めながら、この後どう慰めようかと思考する。

考へてゐる間に残つた男も姿を消した。

立ち尽くしてゐる千聴に近寄り、優しく抱きしめてやる。

すすり泣く音が止むまで、二人は動くことはなかつた。

余談であるが、不良達は全員拘束された。

全裸の男達がエントランスに転移され、本部は一時騒然としたそうだ。

リーダーの男は他の男達の股間に顔面に次々と現れたせいで、ショックで数時間分の記憶が飛んだらしいと記録されている。